〔報告〕

『外村繁書誌稿』補遺（一）

――書目・著述年表（『友愛』誌ほか）篇――

外村　彰

○はじめに

拙稿は『外村繁書誌稿』（五個荘町教育委員会、平成十・七）刊行後、現在までに調査した、同書の「補遺」である。なお今後は継続して「補遺」の文責を、全て執筆者が担うことを明記する。

内容は「書目補遺」「著述年表補遺」「著述年表再録」にわけ、前掲書に準じた形式で発行年月日順に記した（前掲書では誌紙不詳であったが、あらたに判明した場合も加えた）。「参考文献補遺」「参考文献再録」は、紙数の都合により今回は割愛した。

おもな協力者を以下に記し、深謝の意を表したい（五〇音順敬称略）。あきつ書店店主、阿部忠信、川地素崇、菊池美保、国立国会図書館、五個荘町立図書館、小山諄積、佐々木史、佐藤美恵子、杉並区立中央図書館、ゼンセン同盟教育広報局、田中良彦、外村文象、冨澤文明、新見正彰、原祐子、松坂俊夫、三宅泰久、立命館大学図書館。

今回の調査では、おもに以下の文献を参考にした。

・教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成第三期・人間形成と教育編　第十五巻』（日本図書センター、平成三・一）

・小林修「雑誌『インテリゲンチヤ』細目」『歌子』創刊号（実践女子短期大学、平成五・三）

・猪熊雄治「文芸誌『旗』の紹介」『学苑』七一六号（平成十二・一）

なお調査は継続中であり、多くの遺漏も存すると思われる。今後とも大方のご高教を待ち望んでやまない。

○凡例

一、構成は、「書目補遺」「著述年表補遺」「著述年表再録」とした。

二、「書目補遺」には「単行本一部所収」を録した。書名・発行年月日・編著者名・発行所・判型・製本・外装・定価、また（　）内に注記を記し、収載された題目とその頁数を挙げた。

三、「著述年表補遺」は、「題目」・『誌紙』・書名・巻号数ないし発行所、発行年月日を記し、頁数、（　）内に注記、〈　〉内

に再録を記した。
四、「著述年表再録」は右記に準じ、（　）内に初出を注記した。
五、表題の異同については、適宜加除を行なった。目次・記事欄の記述も用いた。
六、不詳・未見の文献にはその旨を記し、＊印を付した。
七、表記は人名など一部を除き旧漢字は新字とし、「々」以外のくり返し符号は前の字を重ねて記した。傍点・ルビは省略した。誤植と思われる箇所には（ママ）を付した。
八、雑誌の発行所は適宜（　）内に記載した。巻号数の「第」は省略した。なお巻号、頁、面、版数は漢数字で統一し「10」なら「一〇」の形で表記した。
九、小説（創作）として書かれたとみられる題目には、末尾にローマ字表記の「S」を付した（連載は初回のみ）。

○書目補遺　単行本一部所収（序跋を除く）

・小説年鑑Ⅲ　1949年4―6月　昭和二十四年十二月十日　豊島与志雄ほか編　八雲書店　B6判　二五二頁　並製　カヴァ　定価百七十円
　夢幻泡影　一五七――七八頁
　（再録　初出は『文芸春秋』昭和二十四・四）
・川　昭和三十五年九月十七日　井上靖編　有紀書房　B5判変型　二二五頁　角背　上製　函　帯　定価五百八十円
　最上川（抄）　七五――八〇頁
　（再録　初出は『文芸』昭和二十五・二）
・薔薇盗人　鵜の物語　雨の日文庫第5集18　昭和四十四年五月二十日　阿部知二ほか監修　麥書房　A5判　五八頁　並製　定価二千五百円（第5集二十一冊分）
　鵜の物語　一五――五八頁
　（再録　初出は『麒麟』昭和八・九　未見＊）
・ふるさと文学館第七巻　山形　平成六年七月十五日　工藤英寿編　ぎょうせい　A5判　六六三頁　丸背　上製　函　帯　定価六千円
　最上川　九――二九頁
　（再録　初出は『文芸』昭和二十五・二）
・梶井基次郎全集別巻　平成十二年九月二十五日　鈴木貞美編　筑摩書房　A5判　六七四頁　丸背　上製　函　帯　定価七千二百円
　梶井基次郎に就いて　六二――六三頁
　梶井基次郎の覚書　三　六三――六五頁
　『青空』のことなど　七三――七四頁
　梶井基次郎のこと　七四――七七頁
　十一月三日　七七――七八頁
　中谷、梶井のこと　二三〇――二三一頁
　梶井の『過古』について　二三一――二三二頁
　梶井を描く　二三三――二三四頁
　座談会　梶井基次郎の思い出　三五〇――三六七頁

（再録　初出は順に『評論』昭和十・八／『錯綜』初出不詳／『文学集団』昭和二十四・八／『創元』昭和十六・九／「ドングリ日記」『文学界』昭和二十九・十一／『青空』大正十四・十一／『青空』大正十五・三／『青空』大正十五・六／『檸檬通信　梶井基次郎全集』第一、第二巻月報　昭和三十四・二、五）

○著述年表補遺

・「亜の回想」『亜』三五号、昭和二・十二・一　頁数なし（アンケート）

・「愛の書」『自由』一巻一号（自由社）、昭和十二・一・一　一六七——一八五頁（昭和十一・十一・二十五脱稿）　S

・「生活の決意」『インテリゲンチヤ』一巻二号（近代書房）、昭和十二・四・一　二〇頁（「生活の決意　三」として『日本の土』）

・題不詳『詩原』一巻四号（赤塚書房）、昭和十五・月不詳　未見＊

・「小さい者」『文学通信』二号（ぐろりあそさえて）、昭和十六・二・十五　四——五頁（十五年十二月脱稿）《『日本の土』》

・「古戦史物語　屋島の会戦」『陸軍画報』九巻一〇号、昭和十六・十・一　八〇——九〇頁《『日本合戦史話』》

・「扇の的」『少年倶楽部』二八巻一二号、昭和十六・十二・一　一二六——一三一頁

・「花の若武者」『少年倶楽部』二九巻一号（大日本雄弁会講談社）、昭和十七・一・一　一五四——頁不詳　未見＊

・「—志士吉田松陰—涙松の別れ」『少年倶楽部』二九巻四号、昭和十七・四・一　一一二——一二〇頁

・「河内の宿」『少女倶楽部』二〇巻四号（大日本雄弁会講談社）、昭和十七・四・一　八六——九一頁

・「明治の歌」『科学知識』二二巻六号（科学知識普及会）、昭和十七・六・一　七〇頁

・「選後評」『本格的小説』三巻六号、昭和十七・月不詳　未見＊

・「座談会『現代文学の諸問題』」『本格的小説』三巻八号、昭和十七・月不詳　未見＊

・「最近の愛読書」『文芸汎論』一二巻九号、昭和十七・九・一　四一頁（アンケート）

・「二つの御楯」『少年倶楽部』二九巻九号、昭和十七・九・一　一〇〇——一〇五頁

・「歴史ある国—河野父子の奮戦—」『少年倶楽部』二九巻一〇号、昭和十七・十・一　一一四——一二二頁

・「秋長けて」『新女苑』六巻一二号、昭和十七・十二・一　一〇二——一〇六頁　S

・「春の祭」『青春』一巻三号（桃源社）、昭和二十一・八・一　三二——四〇頁（同年五月脱稿）S《『紅葉明り』》

・「夕焼の歌」『少女クラブ』二五巻九号（大日本雄弁会講談社）、昭和二十二・十・一　一八——二五頁　S

・「青年への期待」『新生日本文学』二巻九号（新生日本文学社）、昭和二十二・十二・一　三一——三三頁

・「月光」『サンデー毎日』別冊（巻号数なし）、昭和二十二・十二・十　八一――八五頁　S
・「早春の迎酒」『文化新聞』九五号、昭和二十三・二・十一　四面
・「藤原君と秋津温泉」『秋津温泉』（藤原審爾）大日本雄弁会講談社、昭和二十三・九・三十　二一一――二一四頁
・「木犀の咲く頃」『文化新聞』一二九号、昭和二十三・十・十三　二面　S（一、二章）
・「木犀の咲く頃」『文化新聞』一三〇号、昭和二十三・十・十四　二面（三章）
・「夕空の歌」『少女クラブ』二六巻一二号、昭和二十三・十二・一　一〇――一五頁　S
・「やもめ日記」『婦人文庫』四巻六号（鎌倉文庫）、昭和二十四・六・一　五八――五九頁
・「淡雪（第一回）」『友愛』二七号（全繊同盟友愛編集部）、昭和二十五・四・一　一〇――一八頁　S
・「淡雪」（第二回）『友愛』二八号、昭和二十五・五・一　一〇――一八頁
・「太宰治のことども」『文化新聞』号不詳、昭和二十五・五・未見＊
・「淡雪（第三回）」『友愛』二九号、昭和二十五・六・一　三八――四六頁
・「淡雪（第四回）」『友愛』三〇号、昭和二十五・七・一　一二――二〇頁
・「淡雪（第五回）」『友愛』三一号、昭和二十五・八・一　一六――二四頁
・「淡雪（第六回）」『友愛』三二号、昭和二十五・九・一　一四――二二頁
・「淡雪（第七回）」『友愛』三三号、昭和二十五・十・一　二〇――二八頁
・「淡雪（第八回）」『友愛』三四号、昭和二十五・十一・一　六――一五頁
・「淡雪」（九回）『友愛』三五号、昭和二十五・十二・一　六――一四頁
・「淡雪（終回）」『友愛』三六号、昭和二十六・一・一　五一――五九頁
・「白い薔薇」『婦人画報』五五七号、昭和二十六・二・一　一一五――一二二頁（昭和二十五・十脱稿）　S
・「名士回答　あなたはどんな女性が好きですか」『友愛』四三号、昭和二十六・八・一　五〇頁（アンケート）
・「故郷は（第一回）」『友愛』五一号、昭和二十七・四・一　二三――二九頁　S
・「故郷は（第二回）」『友愛』五二号、昭和二十七・五・一　二六――三二頁
・「故郷は（第三回）」『友愛』五三号、昭和二十七・六・一　二三――二九頁
・「故郷は（第四回）」『友愛』五四号、昭和二十七・七・一

二三——二九頁
・「故郷は（第五回）」『友愛』五五号、昭和二十七・八・一
二三——二九頁
・「故郷は（第六回）」『友愛』五六号、昭和二十七・九・一
二八——三四頁
・「故郷は（第七回）」『友愛』五七号、昭和二十七・十・一
三二——三八頁
・「故郷は（第八回）」『友愛』五八号、昭和二十七・十一・一
三〇——三六頁
・「昔ばなし」『読売新聞（夕）』二七二六三号、昭和二十七・十一・一　四面　四版（四枚）S（「むかしばなし」と改題『よみうりどうわ10』）
・「故郷は（第九回）」『友愛』五九号、昭和二十七・十二・一
二四——三〇頁
・「花を求めて　三先生に女性の正しい生き方をきく（座談会）」『友愛』六〇号、昭和二十八・一・一　二四——三一頁（福田清人、阿部静枝ほか）
・「故郷は（第十回）」同右　三三——三九頁
・「故郷は（第十一回）」『友愛』六一号、昭和二十八・二・一
二四——三〇頁
・「故郷は（第十二回）」『友愛』六二号、昭和二十八・三・一
三二——三八頁
・「故郷は（終回）」『友愛』六三号、昭和二十八・四・一
三四——四〇頁
・「映画とリアリズム—市井の一観客として—」『会館芸術』一一巻五号（朝日新聞大阪厚生文化事業団）、昭和二十八・五・五　二五頁
・「民衆と共に生きた芸術家⑤　人生の悲喜をうたう　俳人一茶」『友愛』七一号、昭和二十八・十二・一　一〇——一三頁
・「読後評」『友愛』七五号、昭和二十九・四・一　九三頁
・「選後評」『友愛』七六号、昭和二十九・五・一　九二頁
・「選者の言葉」『友愛』七七号、昭和二十九・六・一　九一頁
・「選の言葉」『友愛』七八号、昭和二十九・七・一　九一頁
・「選者の言葉」『友愛』七九号、昭和二十九・八・一　九〇——九一頁
・「近江商人考—上—」『友愛』八〇号、昭和二十九・九・一
三四——三七頁
・「選者の言葉」　同右　九三頁
・「近江商人考—中—」『友愛』八一号（全繊同盟教宣部友愛係）、昭和二十九・十・一　四〇——四三頁
・「選者の言葉」　同右　九一頁
・「近江商人考—下—」『友愛』八二号、昭和二十九・十一・一
四二——四五頁（全集六巻／抄録『日本随筆紀行16』）
・「選者の言葉」同右　九一頁
・「選者の言葉」『友愛』八三号、昭和二十九・十二・一　七九頁
・「選者の言葉」『友愛』八四号、昭和三十・一・一　七九頁
・「選者の言葉」『友愛』八五号、昭和三十・二・一　七七頁

・「選者の言葉」『友愛』八六号、昭和三十・三・一　七五頁
・「作品の作り方」同右　七六――七九頁
・「選者の言葉」『友愛』八七号、昭和三十・四・一　八一頁
・「選者の言葉」『友愛』八八号、昭和三十・五・一　八一頁
・「選者の言葉」『友愛』八九号、昭和三十・六・一　八三頁
・「選者の言葉」『友愛』九〇号、昭和三十・七・一　八一頁
・「小説の書き方」『友愛』九一号、昭和三十・八・一　八二――八五頁
・「選者の言葉」『友愛』九二号、昭和三十・九・一　八一頁
・「職場文芸について」『友愛』九三号、昭和三十・十・一　一八――二一頁
・「短編小説選後評」同右　三二――三三頁
・「選者の言葉」同右　八九頁
・「選者の言葉」『友愛』九四号、昭和三十・十一・一　八五頁
・「選者の言葉」『友愛』九五号、昭和三十・十二・一　八七頁
・「緑の船と赤いネクタイ」『朝日新聞』二五〇八五号、昭和三十・十二・四　七面　一二版
・「選者の言葉」『友愛』九六号、昭和三十一・一・一　八三頁
・「選者の言葉」『友愛』九七号、昭和三十一・二・一　八七頁
・「選者の言葉」『友愛』九九号、昭和三十一・四・一　八七頁
・「短編小説　選後評」『友愛』一〇〇号、昭和三十一・五・一　三六――三七頁
・「選者の言葉」同右　一一五頁
・「選者の言葉」『友愛』一〇一号、昭和三十一・六・一　八三頁
・「選者の言葉」『友愛』一〇二号、昭和三十一・七・一　八七頁
・「序」『あなた買います』（小野稔）三笠書房、昭和三十一・七・十五　三――五頁（同年六月脱稿）
・「選者の言葉」『友愛』一〇四号、昭和三十一・九・一　九一頁
・「短編小説　選後評　自分だけのただ一つのものを――」『友愛』一〇六号、昭和三十一・十一・一　三八――三九頁
・『掌編小説』選後評　同右　一二〇――一二一頁
・「選評」『友愛』一〇七号、昭和三十一・十二・一　一〇一頁
・「作家と批評」『辺境文学』四号（辺境文学会）、昭和三十二・二・十　二頁
・「選者の言葉」『友愛』一一〇号、昭和三十二・三・一　一〇五頁
・「選者の言葉」『友愛』一一二号、昭和三十二・五・一　一〇二頁
・「短編小説　選後評　自分の心を鏡に映した作品を」『友愛』一一三号、昭和三十二・六・一　二四――二五頁
・「選者の言葉」　同右　一二五頁
・「選者の言葉」『友愛』一一五号、昭和三十二・八・一　九一頁
・「愛と死とその運命」『友愛』一一六号、昭和三十二・九・一　九六――一〇三頁（三十二・七脱稿）　S
・「選者の言葉」『友愛』一一〇号、昭和三十二・十・一　一〇三頁
・「蔵王東麓の青根・峨々」『旅』三一巻一一号、昭和三十二・十一・一　三四――三五頁
・「選後評」『友愛』一一八号、昭和三十二・十一・一　一一四

――一一五頁
・「選評」『友愛』一一九号、昭和三十二・十二・一　五一頁
・「選者の言葉」　同右　九九頁
・「評」『友愛』一二〇号、昭和三十三・一・一　九〇――九一頁
・「選評」『友愛』一二一号、昭和三十三・二・一　一〇〇頁
・「選者の言葉」『友愛』一二三号、昭和三十三・四・一　一〇一頁
・「選後評」『友愛』一二五号、昭和三十三・六・一　九九頁
・「選者の言葉」『友愛』一二八号、昭和三十三・九・一　九一頁
・「選者の言葉」『友愛』一三二号、昭和三十四・一・一　九七頁
・「選評」『友愛』一三三号、昭和三十四・二・一　九七頁
・題なし『業平系図』（中谷孝雄）帯　河出書房新社、昭和三十四・二・二十五
・「選者のことば」『友愛』一三四号、昭和三十四・三・一　九七頁
・「選評」『友愛』一三五号、昭和三十四・四・一　八五頁
・「新人の登場を期待　何れにしても作品が少ない　選者の言葉」『友愛』一三七号、昭和三十四・六・一　五六――五七頁
・「愛と死を凝視する　田宮虎彦著『黄山瀬』」『友愛』一三九号、昭和三十四・八・一　七二――七三頁
・「選者の言葉」『友愛』一四〇号、昭和三十四・九・一　九七頁
・「選後評」『友愛』一四一号、昭和三十四・十・一　一〇〇頁
・「美しい詩情　真尾悦子著『たった二人の工場から』」『友愛』一四三号、昭和三十四・十二・一　七三頁
・「選者の言葉」『友愛』一四四号、昭和三十五・一・一　九九頁
・「選者の言葉」『友愛』一四八号、昭和三十五・五・一　八〇――八一頁
・「選評」『友愛』一五一号、昭和三十五・八・一　八七頁
・「職場文学の方向―応募小説をめぐって―〈対談〉」『友愛』一五五号、昭和三十五・十二・一　三六――四五頁（平林たい子ほか）
・「選者の言葉」『友愛』一六三号、昭和三十六・八・一　九〇――九一頁

○著述年表再録（単行本を除く）

・「愛国心」『群像』一六巻一号、昭和三十六・一・一　表紙裏
「パイロット万年筆」広告頁（「阿佐ヶ谷日記（11）」『化学時評』昭和三十五・十一初出）
・「再び『日照雨』について」『定本佐藤春夫全集第13巻　月報22』臨川書店、平成十二・一・十　七――八頁（抄録『文芸日本』昭和二十八・一初出）

○追記　『外村繁書誌稿』訂正・追加

・35頁一〇行　放送随筆　カヴァ――→カヴァ　帯
・36頁一五行　随筆春秋　カヴァ未見＊――→カヴァ
・49頁一三行　ふるさと文学館　函――→函　帯
・151頁下段八行　『中外日報』号不詳――→一九八一三号
・索引11頁　「白い鳥」について――9，63（追加）

＊表記の訂正

・52頁六行　「過去」―「過古」
・59頁一行　「十号」―「一〇号」
・68頁一行　「十巻」―「一〇巻」
・74頁三行　「二十　」―「二十　S」
・77頁一四行　「S（全」―「S〈全」
・120頁下段一八行　「誌紙名」―「誌紙」
・142頁下段二、三行　「「日本―55葬」」―「『日本―55葬』」

○ 補記　他の文学者の『友愛』収載文について

「はじめに」で先述した協力者のうち、ゼンセン同盟教育広報局所蔵の全繊同盟（現ゼンセン同盟）中央機関誌『友愛』（現『Yuai』）誌には、外村繁以外の作家詩人による文章類も多く収載されていた。所蔵は同広報局に限られているため、多くがこれまで知られていなかった資料とみられるので、主なものを以下に紹介しておきたい。ただし発刊年の昭和二十二年から、外村繁没後の昭和四十年までを調査年限とした。

連載小説には、伊藤永之介「明けゆく処女地」（昭和二十六）、菊田一夫「この道に花咲く」（昭和二十五・六～十二）、平林たい子「白い花」（昭和二十七・一～五）、福田清人「愛の草笛」（昭和二十七・六～二十八・三）、円地文子「太陽に向っ（い）て」（昭和三十・十二～三十一・十）、中村八朗「青い実の熟す時」（昭和三十四・六～三十六・五）、中里恒子「花炎」（昭和三十七）、芝木好子「跳んでる娘」（昭和三十八～三十九）等がみられた。

短編小説では、上林暁「お花見」（三八号、昭和二十六・三）、円地文子「南のゆめ」（九一号、昭和三十・八）、梅崎春生「奥さん、お茶をもう一杯」（九二号、昭和三十・九）、津村節子「明日の歌」（一六四号、昭和三十六・九）、瀬戸内晴美「青春の押花」（一六五号、昭和三十六・十）が注目される。

評論随想の連載には、遠藤周作「恋愛心理の分析」（昭和三十二・五～十）のほか、古谷綱武の女性論や随想、武者小路実篤の巻頭随想、浅見淵の東西名作紹介等が長期間掲載されていた。また阿部静枝、山本健吉、福田清人、佐古純一郎、亀井勝一郎、原田義人にも連載がある。この他、青野季吉、中谷孝雄、鑓田研一、十返肇、串田孫一、神保光太郎、吉行淳之介、奥野健男、市川房枝、赤松常子、堀秀彦、徳川夢声、坪田譲治も評論や随想、書評を寄稿している。詩では大木惇夫「沈丁花」（七四号、昭和二十九・三）等がある。

対談・座談会には花森安治、賀川豊彦、平林たい子、武者小路実篤、木俣修、亀井勝一郎なども参加していた。なお江戸川乱歩、白井喬二、森至、福田清人による座談会「読書のための文壇楽屋ばなし」（八一号、昭和二十九・十）は同誌では異色の企画である。

読者文芸欄の選者には、創作欄の外村繁のほかには、生活綴り方を外村繁の妻であった金子貞子（当時文部省社会教育課事務官）、詩を壷田花子、短歌を木俣修、俳句を中村汀女が担当していた。土門拳も写真応募の選者であった。

（とのむら・あきら　大阪産業大学非常勤講師）